

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

瓜割遺跡

三ノ輪遺跡

六右工門清水遺跡

三貫梨遺跡

1991

長岡市教育委員会

序

長岡市内には200ヶ所を超える遺跡がありますが、そのほとんどは詳しい遺跡の規模や内容がつかめていません。長岡市教育委員会では国・県から補助金の交付を受けて、昭和62年度から遺跡の概要等を把握することを目的に遺跡の確認調査を行ってきました。これまでに10遺跡で調査を行い、埋蔵文化財の保護や開発に伴う遺跡の保存協議などの資料を得ました。

この報告書は上地区画整理事業が計画されている五反田町地内の周知の3遺跡と、建築資材置き場等の計画地の遺跡を対象に調査を実施した平成2年度の発掘調査の記録です。調査の結果、遺跡の概要を知ることができ、今後の開発計画との調整協議の資料として貴重なデータが得られました。

今回の調査を実施するにあたり、多大な御指導・御協力をいただいた文化庁・新潟県教育委員会をはじめ関係各位に心からお礼を申し上げます。

平成3年3月

長岡市教育委員会

教育長 丸山 博

例　　言

1. 本書は平成2年度の国・県の補助金の交付を受けて実施した「長岡市内遺跡群発掘調査」の報告書である。
2. 調査は長岡市教育委員会が主体となって平成2年10月から11月に行った。
3. 本書は駒形が執筆・作成した。

目　　次

1. 五反田町地内の遺跡	1
(1) 調査に至る経緯	
(2) 調査の経過	
(3) 環境	
(4) 土層序	
(5) 瓜湖遺跡	
(6) 三ノ輪遺跡	
(7) 六右エ門清水遺跡	
2. 三貫梨遺跡	9
3. おわりに	14
調査体制	14
調査に御指導・御協力を いただいた方々	14

1. 五反田町地内の遺跡

(1) 調査に至る経緯

長岡市の西部に位置する関原町から五反田町にかけての地域で、土地区画整理事業が計画され、これに先立って、事業計画地にある周知の遺跡（瓜割遺跡・三ノ輪遺跡・六右エ門清水遺跡）について、範囲・内容等の遺跡確認調査の要請があった。長岡市教育委員会ではこの要請を受けて、確認調査を平成2年10月中旬から下旬に行った。なお、事業計画地にはその他に瓜割塚群が位置していたが、塚はその位置や範囲及び規模等は外形からも判断できるため、確認調査は行わなかった。

(2) 調査の経過（平成2年10月6日～10月23日）

調査機材を関原町農業協同組合の倉庫に10月6日に運び入れ、ここから遺跡確認調査を始める。調査は瓜割遺跡から三ノ輪遺跡そして六右エ門清水遺跡と移動しながら、10月23日まで行った。調査グリッドは $2 \times 3\text{ m}$ を原則として設置し、人手で発掘を行った。三ノ輪・六右エ門清水の2遺跡は作付け中の畠地と三ノ輪神社境内地は除いて調査を行った。

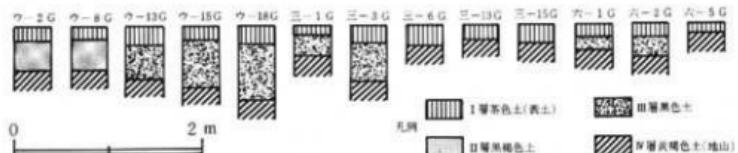
(3) 環境（第2図）

長岡市のはば中央には信濃川が南北に流れ、長岡を二分している。そして、信濃川左岸には「関原丘陵」と通称される河岸段丘が広がり、この河岸段丘上には馬高・三十稻場遺跡（繩文中期・後期）や藤橋遺跡（繩文晩期）の大集落をはじめ、それを取り巻くように転堂遺跡（繩文中期）や尾立遺跡（弥生中期）など、小規模の遺跡が互いに連携しながら展開している。

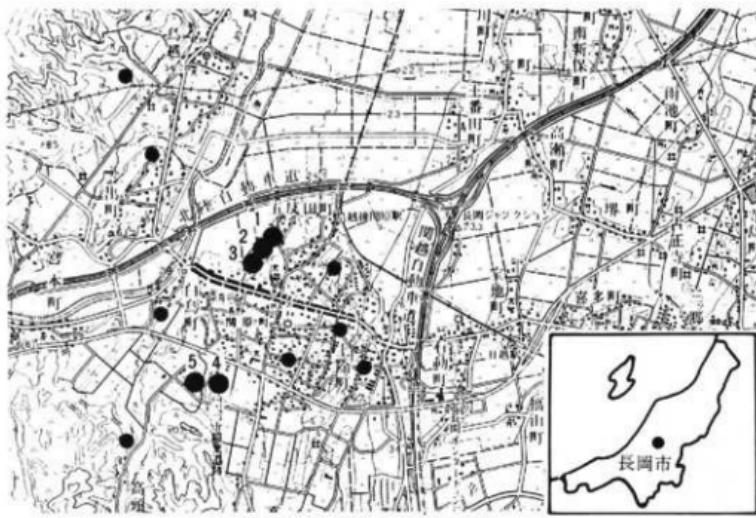
今次調査の対象になった3遺跡は、この関原丘陵の北西縁辺で、新潟平野を臨む位置に並ぶように立地していた。この3遺跡も関原丘陵上の繩文から弥生時代遺跡群の一つである。

(4) 土層序（第1図）

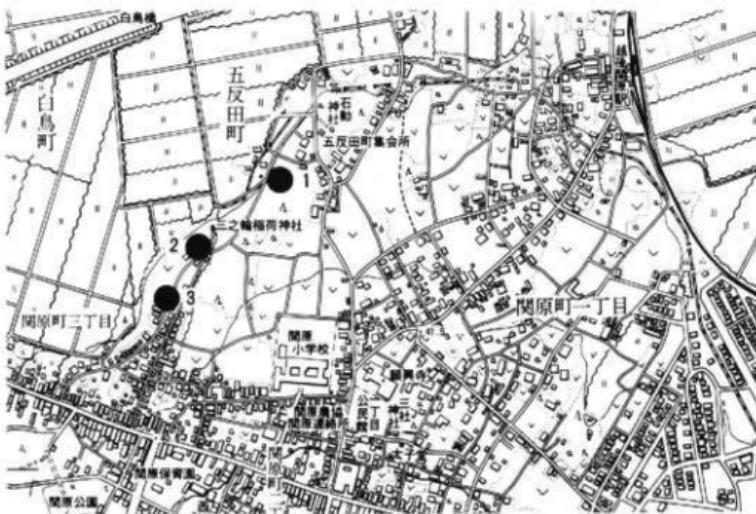
五反田町地内の遺跡の基本土層序はI層茶色土（表土）、II層黒褐色土、IV層黄褐色土（地山）で、この基本土層がみられたのは瓜割遺跡の構造・遺物を含んでいた地域（1～9G）に限られ、他にはII層はみられなかった。なお、山林に設定したグリッドにはIII層黒色土が堆積していた。



第1図 瓜割・三ノ輪・六右エ門清水遺跡の土層柱状図



遺跡周辺の縄文道路 (1/50,000: 長岡)



遺跡周辺の地形図 (1/10,000)

第2図 遺跡位置図 (1.瓜割、2.三ノ輪、3.六右エ門清水)
(4.馬高、5.三十船場)

(5) 瓜割(うりわり)遺跡(第1図~第4図)

所在地 長岡市五反田町字中畠524-1他

立地 関原丘陵の北西の縁に並ぶ3遺跡の中では北に位置する。

現況は雜木林である。標高は33mで、新潟平野との比高は約6m。

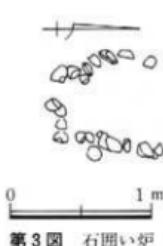
調査の結果 瓜割遺跡は昭和30年代の道路工事中に発見された縄文

中期の遺跡である。調査グリッドは山林の中で $2 \times 3\text{ m}$ を基本に21カ

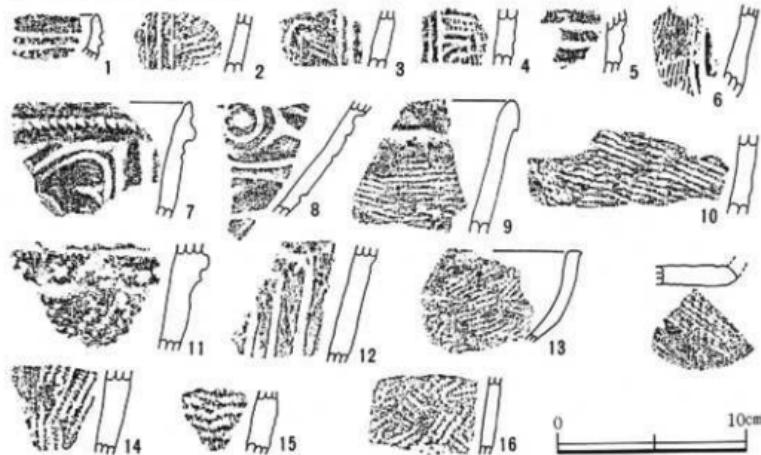
所(発掘面積124m²)設定した。遺構・遺物の分布は南~東~北を埋
没した沢に囲まれた範囲に限られた。

遺構(第3図) 7Gで、小石で作られた炉が1基あった。石圓い炉周辺で、炉以外に
竪穴住居跡の施設(柱穴跡など)は発見されなかった。炉跡周辺出土の土器は縄文中期前葉
の土器で、炉跡の年代はこのころと思われる。

遺物(第4図) 瓜割遺跡の出土遺物は縄文時代中期の土器片の123点(重量980g)だけ
で、石器などの遺物は出土しなかった。土器は中期前葉の大木7b式から中葉の8a式並行
期である。1は中期前葉の爪形文土器。2・3は平行沈線文で大木7b式ごろの土器である。
4は平行沈線文に格子目を充填している新保・新崎式。5は半隆起線文で、6は地文が燃糸
文で半隆起線がある土器で、いずれも大木8a式の土器であろう。7は口縁直下に連続押し
引きによる爪形文風の刻み目があり、隆線を挟んでの胴部には三叉文の印刻がある。8も玉
抱き三叉文が印刻された浅鉢土器で、県内地の土器で、大木式なら7b式で、北陸との比
較なら新崎式ごろであろう。9は折り返し口縁の土器で、10は9の胸部破片と思われる。11



第3図 石圓い炉



第4図 瓜割遺跡出土縄文土器

は押圧のある粘土紐を貼付した土器で、9~11は大木8a式と思われる。12は竹管の背による沈線文で、大木8a式若しくは8b式と考えられる。13~16は縄文施文の土器である。17はアンギン編み痕跡の底部破片。

まとめ 瓜割遺跡は調査で石囲い炉や縄文土器を検出し、縄文時代中期の集落跡であることを確認した。遺跡の範囲は遺構・遺物の検出状況及び地形的な要因（西が沖積地への崖、南北及び東に沢）から第7図に示した位置（格子目の範囲）と思われる。

(6) 三ノ輪(みのわ) 遺跡(第5図~第7図)

所在地 長岡市五反田町字三ノ輪598-1他

立地 関原丘陵の北西側縁辺部に立地し、標高は33m、沖積地との比高は約6mである。現況は畑・宅地・神社境内地。

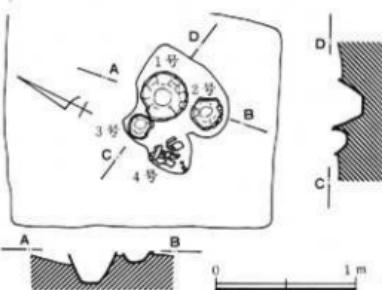
調査の結果 三ノ輪遺跡は縄文後期の遺跡として知られているが、今次調査では縄文時代の遺構・遺物は何ひとつ検出せず、三-15Gで弥生時代中期の再葬墓を確認したのが、本調査唯一の遺構・遺物である。調査グリッドは16カ所(発掘面積92m²)に設定した。

遺構(第5図) 再葬墓は範囲75cm×75cmの中に4個の埋甕が入っていた。掘り形は若干干山がくばんで、埋甕がちょうど収まる程度で、明確な掘り形は確認できなかった。また、近年の整地で埋甕の上半部は削り取られ、4号は破片だけとなっていた。なお、1・2号埋甕には炭化物が付着しており、煮炊き用の甕を転用したと考えられる。

遺物(第6図) 遺物は再葬墓の埋甕だけで、再葬墓の埋甕はこれまでに破片だけの4号を除いた3個を復原した。1号埋甕(第6図1)はハケによる調整痕のある甕で、底部に織物の圧痕が付いていた。2号埋甕(2)も底部から大きく開く甕で、器面調整は櫛による。

3号埋甕(3)は甕で、3条の沈線を挟んで体上半部にはヒトデ形の磨消縄文が、下半部には撚りの細かい縄文が施され、底部の圧痕は織物。再葬墓の時間は3号埋甕から弥生時代中期初めごろと思われる。

まとめ 三ノ輪遺跡は縄文時代後期の遺跡と遺跡台帳に記載されているが、今次調査で「弥生時代中期初めの再葬墓」を記載内容に加えることになった。だが、今次調査は再葬墓以外に遺構・遺物の発見はなかった。土層序の観察では遺物包含層のII層は三ノ輪遺跡調査対象地には分布しておらず、近年の整地で遺物包含層が削平されたと思われる。そして、この削平で遺物は押し流され、遺構は再葬墓1・2号埋甕のように上部が削平され



第5図 三ノ輪遺跡再葬墓

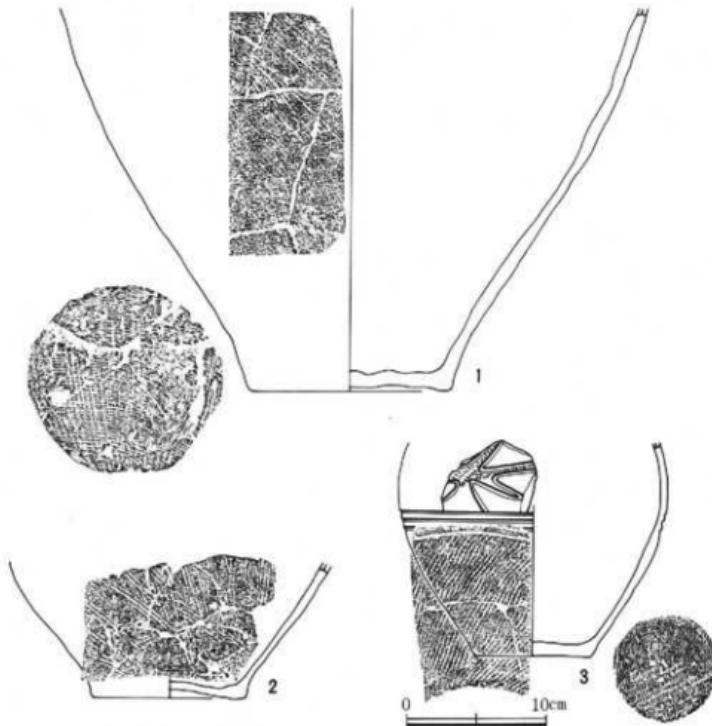
たと考えられる。また、地山面に刻まれた遺構は、密集して存在するとは限らず、たまたま今次調査のグリッドでは15Gの再葬墓だけを発見したにすぎず、この他に存在する可能性は高いと予想される。このため、遺構・遺物の分布状況から調査目的の一つである遺跡範囲を推定することは難しく、今後、関係諸機関と検討を加えて考えていくたい。その際には調査できなかった三ノ輪神社境内地のこととも考慮に入れながら。

(7) 六右エ門清水（ろくえもんしみず）遺跡（第7図）

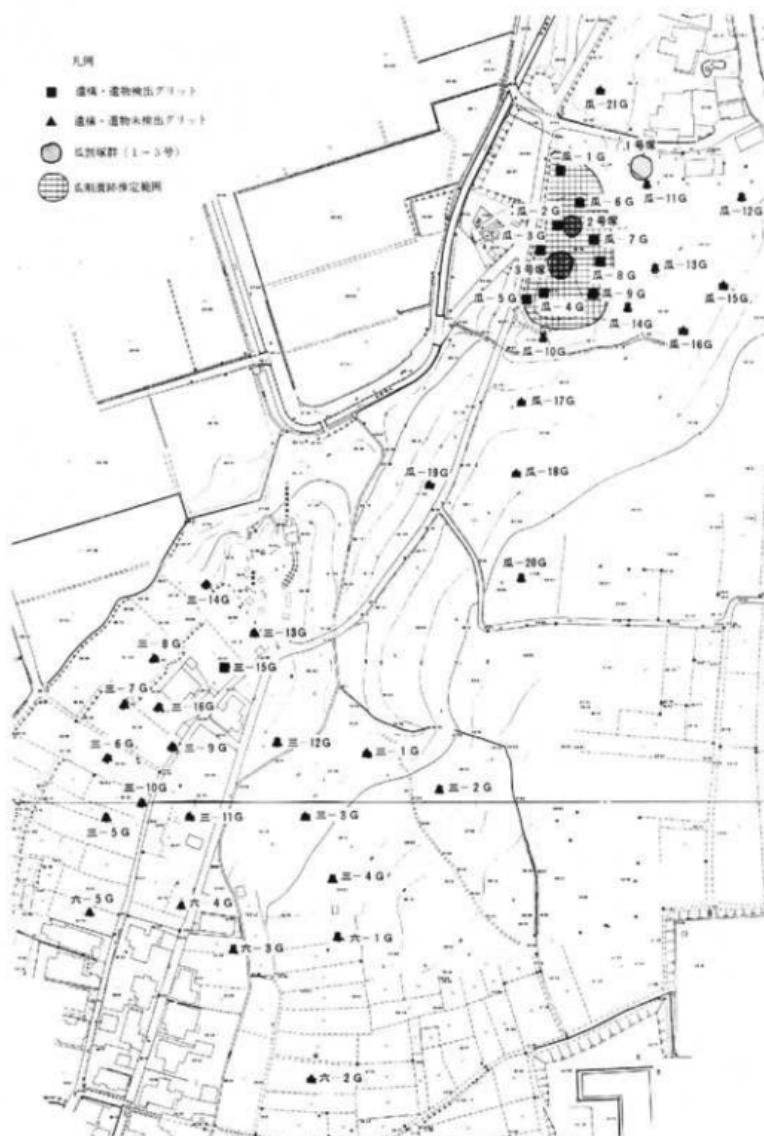
所在地 長岡市五反田町字三ノ輪617-1 他

立 地 瓜割・三ノ輪遺跡と並ぶ閑原丘陵北西縁辺部に位置する。標高33m。宅地及び畠。

調査の結果 今次調査は、開発予定地に 2×3 mの調査グリッドを5カ所（発掘面積30m²）設定して調査した。今次調査では遺構・遺物とともに発見できず、開発及び調査対象地は六右エ門清水遺跡から外れ、遺跡は「六右エ門清水」がある宅地付近と思われる。



第6図 三ノ輪再葬墓の埋蔵実測図



第7図 瓜割・三ノ輪・六右エ門清水遺跡確認調査グリッド図(1/2,000)



瓜割遺跡遺景（西から）



瓜割遺跡石圓いが



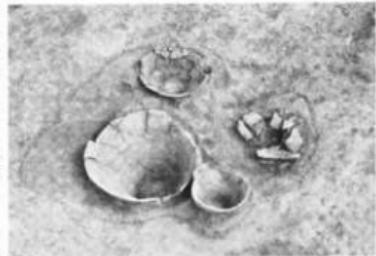
三ノ輪・六右工門清水道路遺景（北西から）



三ノ輪道路遺景（西から）

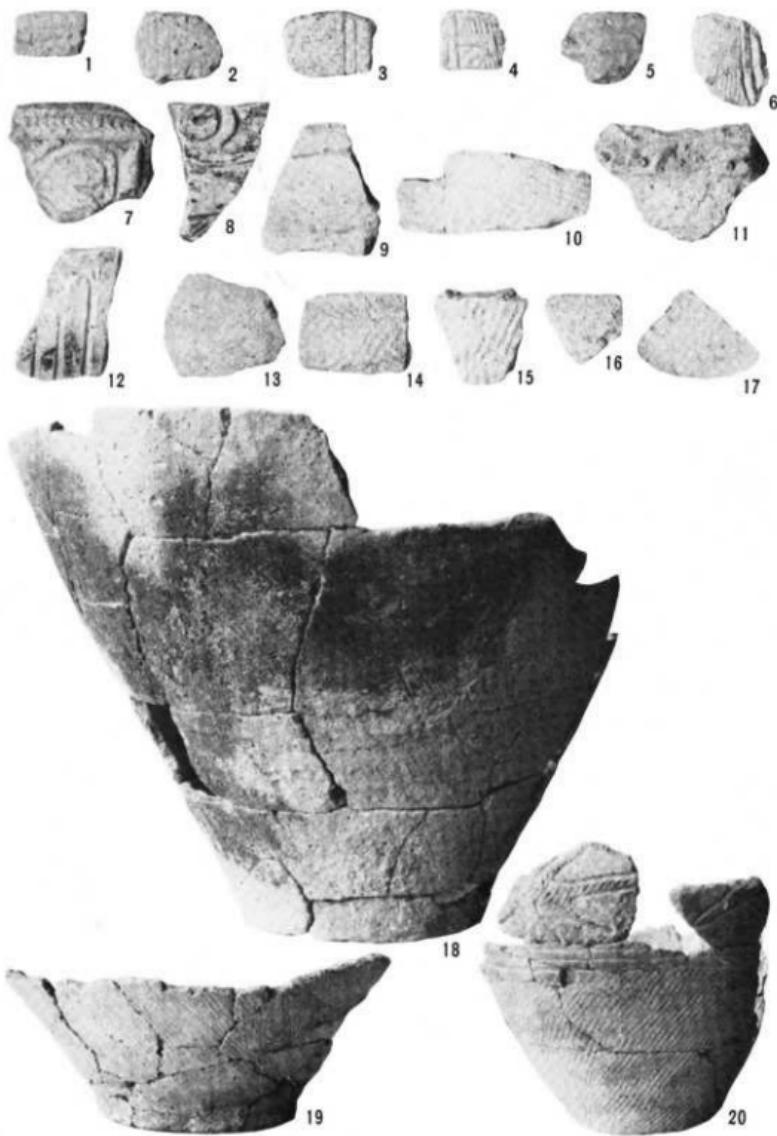


三ノ輪道路免掘風景



三ノ輪遺跡再葬墓

第8図 五反田町地内の遺跡群確認調査



第9図 瓜割（1～17）・三ノ輪（18～20）遺跡出土土器

2. 三貫梨（さんがんなし）遺跡

所在地 長岡市柄吉町字清水田585-1他

立地 柄吉川左岸の標高65mの河岸段丘上に立地。地目は水田である。

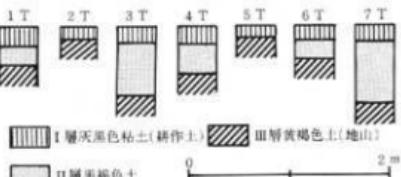
調査（11月13日～11月27日） 三貫梨遺跡は国道352号線のバイパス工事に伴って昭和60年と61年の2カ年にわたって発掘調査を行い、中世墳墓（駒形敏朗外「三貫梨遺跡－第1次発掘調査－」長岡市教育委員会 1986年）と、墳墓から約150mほど東へ離れたところに位置していた中世の寺院と思われる館跡（駒形敏朗「三貫梨遺跡－第2次発掘調査－」長岡市教育委員会 1987年）を検出した。今回の調査は、館跡南側の水田を建設資材置き場にする計画が出されたため、開発計画地に館跡の広がりがみられるかを主に、開発計画との協議資料を得ることを目的に実施した。

調査初日は表土の厚さなどを知るため手掘りで発掘し、翌日からはバックフォーでトレンチ発掘をした（第13図）。バックフォーでの発掘は遺構を確認する地山面より若干高い位置までとし、このバックフォー発掘後はジョレンなどを使って遺構確認を行った。調査トレンチは7本設定し、調査面積は約190m²である。

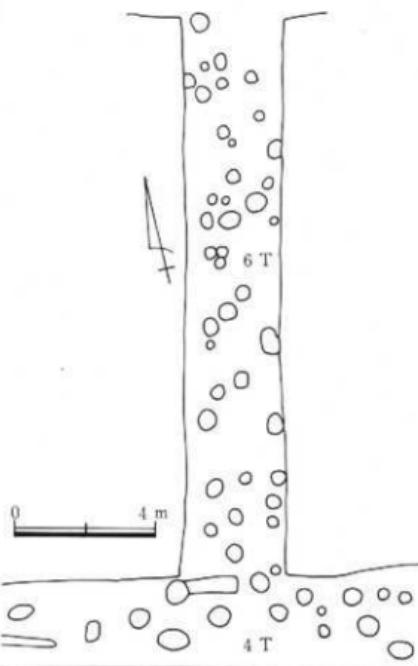
調査の結果 設定したトレンチの全域にわたって、珠洲系陶器などの中世遺物を作つて柱穴らしい遺構を検出し、調査地が館跡の一部であることを確認した。

土層序（第10図） 基本土層序は3層で、II層が遺物包含層である。地山面までの深さは2Tや5Tの東側で15cmと浅いが、西側の3・7Tでは70～80cmと深くなり、地山面が東から西方向に傾斜していることを示している。

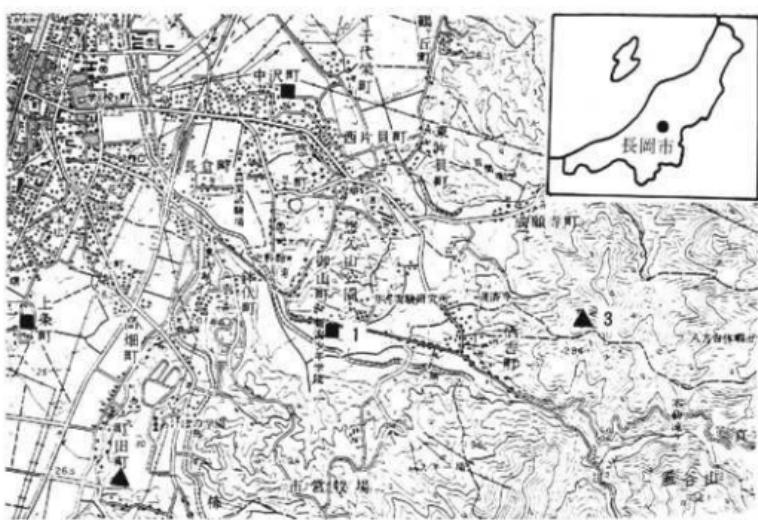
遺構（第11図） 設定トレンチ全体



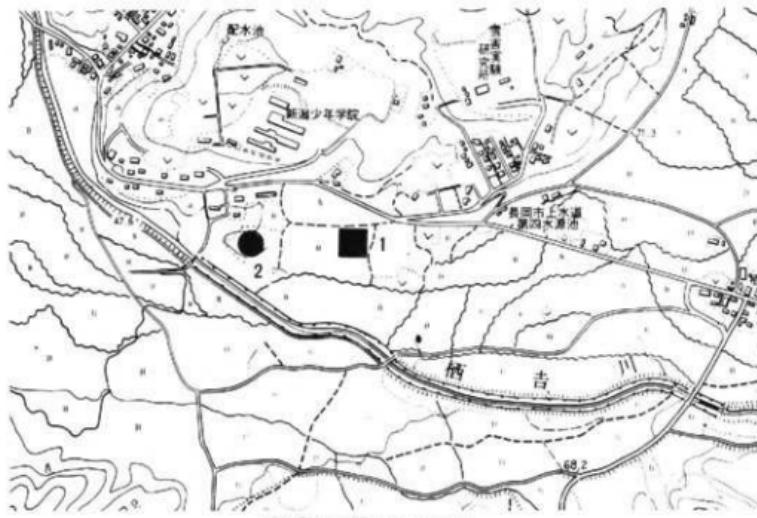
第10図 三貫梨遺跡土層柱状図



第11図 三貫梨遺跡4・6T遺構確認状況図



遺跡周辺の中世城跡跡（1／50,000：長岡）



遺跡周辺の地形図（1／10,000）

第12図 遺跡位置図（1.三貫梨館跡、2.三貫梨墳墓、3.柄吉城）

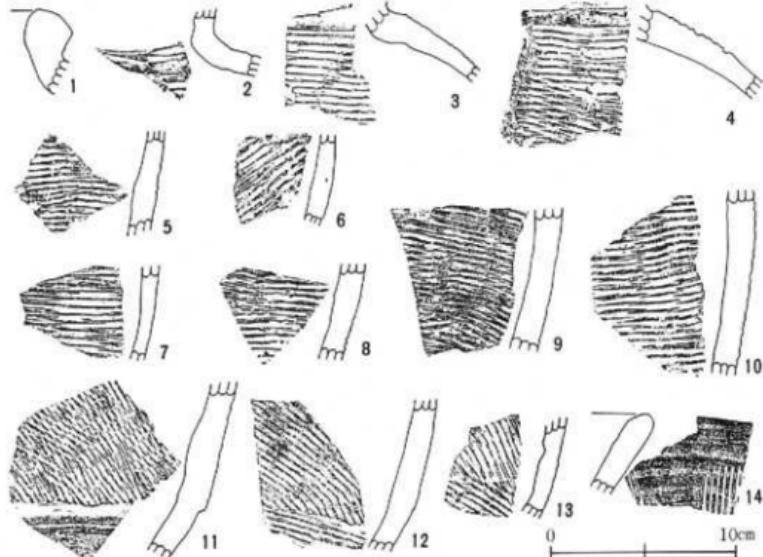
に直径30~50cmの柱穴や溝など遺構の落ち込みが分布していた。遺構は発掘しないため、その正確な性格は不明である。また、柱穴状の落ち込みの分布から建物跡を推定することは、調査トレーニングの幅が約3mほどであることなどからできなかった。

遺物（第14・17図） 遺物は青磁（第17図1）、染め付け（第17図2）、天目、常滑系陶器・珠洲系陶器（第14図）などの中世陶磁器が53点（2,355g）、それに摩滅した銅錢（第17図20）らしいものが1枚あっ

た。珠洲系陶器は摺鉢が1点（第14図14）の他は甕で、11~13は卯目の状況などから底部に近い破片と思われる。常滑系陶器は甕がほとんどで、青磁・染め付けは碗である。中世遺物の時間は前の調査と同じ15世紀代と考えられる。なお、第17図21は近世の磁器破片である。



第13図 三貫梨遺跡調査トレーニング設定図



第14図 三貫梨遺跡出土珠洲系陶器



遺跡近景（南から）



発掘風景



発掘風景



珠洲系陶器出土状況



調査トレンチ（5T付近）



調査トレンチ（7T付近）

第15図 三貫梨遺跡確認調査

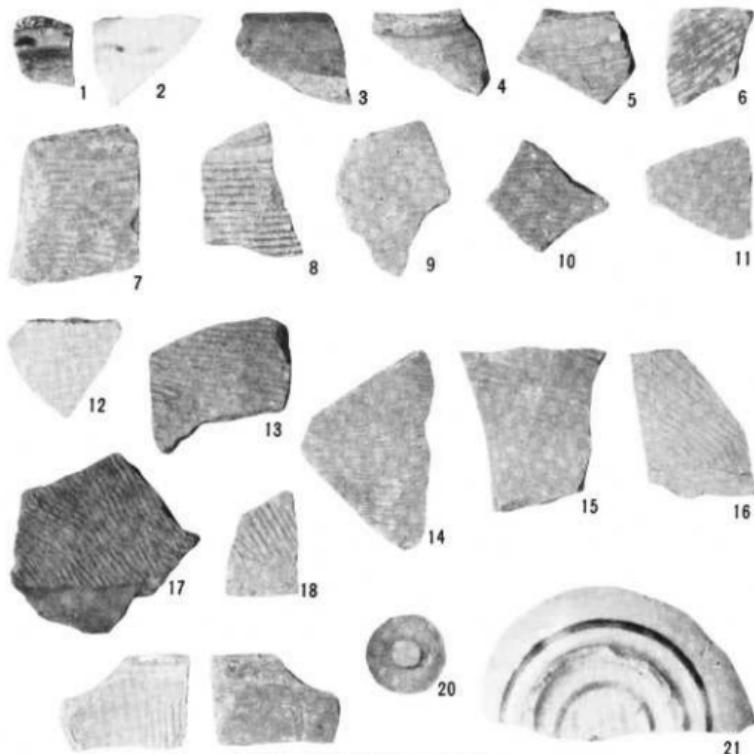


2 T遺構確認状況



4 T遺構確認状況

第16図 三貢梨遺跡遺構確認状況



第17図 三貢梨遺跡出土遺物

まとめ 今回の調査地は中世館跡に隣接する水田で、調査から柱穴や溝と考えられる落ち込み（遺構）を調査地の全域で確認した。そして、珠洲系陶器をはじめとする中世陶磁器が調査地から出土した。このことは調査対象地が寺院跡と思われる館跡の一部であることを示している。そして、館は前の調査報告書（駒形「前掲書」1987）で、東西の86mの距離をおいた堀と、南北の沢と栖吉川への崖という自然の防御施設に囲まれた中にあると予測したこと事を裏付けた。

3. おわりに

今年度の確認調査は開発計画に伴って、遺跡の保存について開発との協議・調整を行うための資料を得ることを目的に実施した。調査の結果、遺跡の範囲を明確にしたり（瓜割遺跡）、館の一角であること（三貫梨遺跡）や、調査地が遺跡から外れていること（六右エ門清水遺跡）を確認した。が、長岡市初の再葬墓を遺跡台帳の記載事項に加えた三ノ輪遺跡は、今次調査では遺跡範囲を推定する資料を得られず、今後に課題を残した結果となった。

長岡市内遺跡群の確認調査は、今年度は二つの開発計画で4遺跡を対象に行った。この他にも確認調査を予定した遺跡は数ヶ所あったが、緊急度などの要因で来年度以降に調査をまわした。今後ともこの確認調査は継続して行い、遺跡に関する資料の整備に努めたい。

調査体制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 丸山 博）
調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会職員）
調査作業員 地元有志
調査事務局 木宮 敦（長岡市教育委員会社会教育課長）、清水正一（同課課長補佐）
鈴木孝行（同課副主幹）、佐山美智子、笠原敏和、小林伸治（同課職員）

調査に御指導・御協力をいただいた方々（五十音順）

池田勇五郎・川田 清・小林安井・本間英彦・室橋キク、ほか（以上土地所有者）
荒木 茂・坂井秀弥・佐々木謙昌・関原町農業協同組合・有限会社大門建設

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

瓜割遺跡・三ノ輪遺跡・六右エ門清水遺跡・三貫梨遺跡

平成3年3月25日印刷 平成3年3月29日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：佛中越
